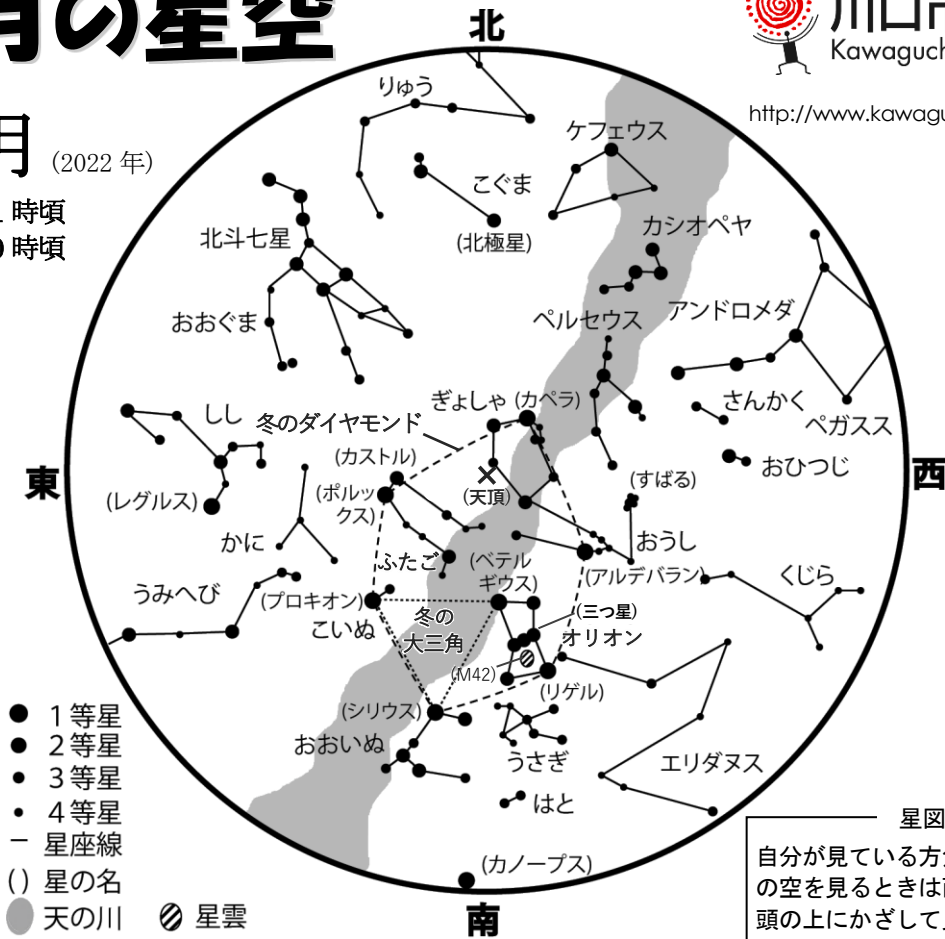


今月の星空



2月 (2022年)

上旬 21 時頃
下旬 20 時頃



星図の見方
自分が見ている方向を下にして、(西の空を見るときは西を下にして持つ) 頭の上にかざして見ます。

月 齢 ● 新月 1日、● 上弦 8日、○ 満月 17日、● 下弦 24日
惑星情報 金星 日の出前 南東(いて座 -5等) 火星 日の出前 南東(いて座 1等)
木星 日の入後 西(みずがめ座 -2等) ※上旬まで

★天頂のカペラ、地平線のカノープス

オリオン座が南の空に見えるこの時期、天頂付近を見上げると五角形の星の並びのぎょしゃ座が見つかります。ぎょしゃ(御者)とは、馬車や牛車を操る人のこと。日本ではその形から五角星や五つ星とも呼ばれています。黄色味をおびた1等星「カペラ」が目印です。カペラは21ある1等星の中で、最も北に位置し(北極星に近い)、川口市では1日のうち18時間以上(日中含む)地上に出ている星です。

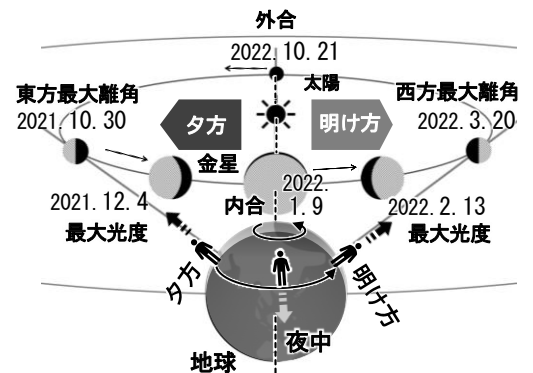
このカペラと象徴的な1等星が「カノープス」です。星図のとおり、オリオン座の下方、地平線付近にある星です。川口市では地平線からわずか2度(月4つ分)に満たないほどの高さにしか昇らず、地上に出ている時間はわずか3時間です。中国では、地平線すれすれに現れる珍しい星であるなどの理由から「南極老人星^{なんきょくろうじんせい}」や「寿星^{じゆせい}」と呼ばれ、縁起の良い星とされました。

※南極老人とは、カノープスを神格化した長寿をつかさどる道教の神。日本では七福神の寿老人や福祿寿の元になったとされる。

★金星が「宵の明星」から「明けの明星」へ

金星が明け方の東の低空に見られるようになりました。金星は太陽、月に次ぐ明るさ(-4~-5等)で輝き、非常に目立つため、古くから、夕方に見えるときは「宵の明星」、明け方に見えるときは「明けの明星」と呼ばれてきました。

この見え方の違いは、地球から見たときの太陽と金星の位置関係で決まります。右図のとおり、金星は、昨年12月頃までは太陽と地球を結ぶ線(点線)の左側にあるため、夕方(西)に見えました。1月9日の内合^{ないごう}後は太陽の右側に移るため、明け方(東)に見えるようになりました。その後、2月13日には最大光度(-4.9等)、3月20日には太陽から最も離れて見える西方最大離角となり、この頃が明け方の空で最も見やすい時期となります。



※国立天文台の画像を元に作成

図 太陽-金星-地球の位置関係と地球の自転による観測者の位置の変化